紫式部家集

上下

紫式部家集序

いかゝ人ぞ集あつめ水まちく
にひめをゝもゝうゝしき人
きくなるゝ匱中ぢ玉かくきうちなる
今うゝ御代のうゝしき人あり私
なゝしぬのゝしゝもかれしゝもゝ
ゝさゝあれあまりにゝきくれ厨子河
うゝさゝあるゝ書車むゝくゝ大ゝの

うゝなゝしゝもゝくちりもゝ見て
ゝゝ殆ゝくゆゝ先ゝのゝゝ
ゝゝぬの集ゝゝゝゝゝゝ母ぢあゝ
喜久といゝゝんさゝうゝにゝゝ
ゝゝうゝうゝくゝちゝゝ人
ぢゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
にゝくゝゝゝゝ離騷乃梅萬葉ぢ

紫に匂くてゝんもうるさくちさとのの
集をゆたうまとうるゆるる紫と世と
うとにせましうるやく折るるる集し
くかいて拝よ初めるるなし
されの世のゆりと嬉しひさし花
萩集の愛は玉ひろふ多年
元禄九年歳次丙子夏四月八日迷花屋
主人加藤虚卿拝書

稲舎文庫

紫式部家集

もやうより見ハとをたちなの見し
人を恋めろへくゆれおひしるほの
うに十月十日ハ日ハ月ハ見ハて
海にをわを
先ゝりいのひく見しや拝見ゝ原
見しるをれかし
拝ハ人を元西へ行日り寄見秋の

九曜文庫

きしの戸あけ暁にむしの声
いとなつかし

夕ぐれのまがきにむしの声ふるる
秋はぎ咲のもとやうなしの多く

さをしかをあはれとやいひあはせん人
後ひかくれぬもとえんとのみてに

夢しけ文ちまれる中はむしの乃秋
初月誘き毋てやひかりのはれん

かりくらにはるたる人はもゆ初月
くれるのはてくれのはてくれるとき

めてあさう月乃見をゆるとく
れほつるなそまうあしぬう河の毋れの

はぎくお月秋もあひさう月はれ
うくを多はれ見とうはるゆやをたん

いつまはぎと毋ゆ秋ほやに動やはち
ひかるうなれるうに奈多はゆるしき

法皇の御人のむまれ
給ふ事ハ月の清き月ニ
ハ西の方ニ向ひ給ふ
なり
西
ゆく〳〵月ハ
すみたえ雲ハ
たなびき
雲ハ
ゆくへ
ゆく月ハ
ものに
なれ
ぬ
雲ハ
ゆくへ
ゆく月ハ
ものに
なれ
ぬ

ゆく雲ハ
ゆくへ
ゆく月ハ
ものに
なれ
ぬ
西
ゆく雲ハ
ゆくへ
ゆく月ハ
ものに
なれ
ぬ
又その人ハ
ものに
なれ
ぬ

ふのしたゝりてゆくあとはかうしも
をはりひとつ婦人のうちへたるを
みてに霜月なかり
しも氷とちたるなるはなくなむ
えもいはぬやしぬこゝちのなしとて
みし
ゆのみもをなす残りの清光を霜氷
あはれへすてゝれをひなかりさん

栄茂はまうてゝあはれにて紙なめんさ
はふ時日のふうる圀は樹柞志らう
見えなき

杜鵑
あはれまた清ほ雲八つるなから乃
とみはしつくみたちやぬまを海し
やよひは一日かりにおかるしにあるなり
なの風車に法師乃如く残りのゆふ世かく
ちるけふかちあるをかしこて

きしかたの物がたりのそこらに
うるさくもまつのみどりのこのな
ほ残りしかの人の名又人のかず
うしなひしかの人のなにおひなひく
なりにしかの人のなにおひなひく
物がたりふかきあはれ中のき
みこの紅葉よりもまさる
ちぎりをいかにせんとやあはれ

りのまたしらぬ
ゆくすゑはいかばかりなること
なるらん紅葉のもえにしく
ちぎりをいかにせんとやあはれ
返しはるかしらぬ人なる
秋の夜ふかき月をみるこにつけ
いつかはこの紅葉ばのもとにて
ほかぬしとなりけれ
ほかぬしといふ所はいかなる
紅葉ばのもとにてなりけれ

たちゆきをのゆく　れいをあ　一のあ
ま

はるし　はひせんやしのふをうみ　ぬ
さと　ゆたかなるうきふあて
ひとりあ　はちあるに
あひうんゆく　れをふあまつ　ゆう

ゆたかれのあ　ゆなさ　ぬをし
て　れうれみちなりゆをいふ　ぬ
ゆく
きうゆうんゆ　れになうぬをはつ　ぬ
ゆに　ゆうみちを　うれもれゆを
水うにれい　ぬをいふもれ

にむかひてくらさんとすれ
入うとすれたゝ一枝をもちてさゝに
たゝいしは海嶽を色深紅やいさもん
解くもさハのぬるうつる色ちうう
おもてにをかしひ乃くたるあさいよ山の雪
目にをかしひ乃くたるあさいよ山の雪
いと細う見やう見をを
あらにうをひ乃く松をうたむ色紅

をしほ乃松をまつ年ふる海の人家
色
わしほ山をもつけうたる紫に年ふるやうハ
みを松ちうに沖紅色をこ沖ん
物をつゝてうをむ沖うをを色紅
如紅をゝ山ちやうに志ちうたる
に人ゝのほををを松ふををゝに
まゝといてゝ

ゆきとにてゆふ山ちはそまつ
あらしやはらくゆきしゆゑをたくまし
てらしてみゆるん
いひなるひとのまきとうをはとはやし
いとくもりはてまつんも
いひなるに
春のまきしもしひとりるつまり
らくへはほとのいはやなれるか

あふさはうをのむはんにあさうを
とをくへ人のゆしあらなしなと
はなにいひをたるあをうるを
く
水うをにはふるあちとりあやなへ
ゆはれをにてをくんなせて
うをにはをはやくかる後の
をてくあつをなけはちまと

にくきくるまに
思ふ方はうしとこそ
やくとをくるまに
物こはうしなほ
はくれけるくるまに
たゝ人乃ゑしに
をとなるはくるまに
うらゝかなるはいとゆゑ

をとよりも人乃むきはくるまに
人なるをゆゑ
くはしみとをとりはつはくるを
こゝをくるまに
はくいひゆゑ
とくいこしくるまに
四月十日
ゑとをなるを
ゑゝはくるまに

さきたちて秋やまつ屋戸はしたれこそ
をうさきもてくるけとをちうなりなりにて
をとをかしうる
あちこちはよりくるほたるうりをそこゆう
いしつ百代水八くもえハたえなる舞
今ををくをとうもをもえしやをちう
ちちくもをををうしひくを
ひくもえはさをを特ををたえ絶なりしその

をちうより池をはけくこしもやん
秋中八すりに水
くもうかくぬ人をなをををををうり
みくうの乃池ををくをををひなり
撫城如絶みさして月のにををも
おくをちりハ桃のををををりて
おりくをををくちりやををををを桃の
里ひをををなををををををををを

西行人

をとゝしの秋千ほの浦にあそぶ

ちゞの浦をしたひて

秋乃波ゆふ風乃

をかくまの風乃さはをにうつる

こゝ見えぬ色なる哉

秋やまいそ波をうつほひかり

ちりのまゝのふる雨ちゆくなり

とをれ西ゆ行ゆ人乃ゆくなを

にうら哉おやをうつるなをうつ

てゝ乃ゆ行ゆ乃ひゝ

いけうしをちくをうつほ

つゝをれをん乃ゆく哉

西行ゆほひなる人よ女院

如をを乃ゆ乃ゆ

みうゝに人乃さををせる

きしかうんを抽れまつたる長きを深み
あをむ枝〳〵さんかの色なる如
風し
なかうこれ泥ゆく船の跡ぬ〳〵きんん
あをこまあるを抽人てをる長きを
をくなわみし人乃むきを抽れ
乃をけてをれつをきを長を抽
見くいひをを

みををををみしを鶯れをる乃
ほをを見を〳〵ををを〳〵をを
れをし人れをを抽をを乃さをの
れをしをれをををををををを
ををを抽ををけをし人を木れをと乃
林し抽ををれをを抽を〳〵を乃
見ひをを抽をを抽人乃見ひを
をを抽れをひれををを

あふにとものけつれ毎よ女は
かくすれたるうしろにおもかり
たるをやとは女銭法師比きりわたる
すきうれくれとて無く縫ふてまは
け歩免毎る不銭見えて
なれ人すかを銭すけてはらしふを
札ふ乃すけやく無くしまくそゆらん

返し

あやしのや君かあ絹の中なる道無く
扨ふ乃すけと無しふくそゆらん
思ふ梅は花見るとて女の法ぜ戸
札しあまて二三人かるれ三分く
称ふる書しれ見毎ふみまいとさる
書れ毎ふれと土乃法ゝつえ津いて
なのあるすゝ河ふみ不

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

陸奥の[illegible]をたづねて
[illegible]浦
[illegible]
[illegible]
[illegible]塩竈の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

とうしみあるものなる
ものへめくれをひしらぬをもとす
うれくらめあるきしのあるなと
年のをわくもとはあれぬをといひ
あるに
あるのさとはなるのたるをにうひをの
歌ものしるはやとれをんん
世の中はさはのしるあるなる

我人のもをへやるとく
きえぬるはは身我ハしるく動思の
愛とあるる我しは世をうけをう動
世我つひ身なをれをふ人のを
さ身れ人のなやをるにうう行
とをはうめにさしたる女をうの
のりるををこく
思の行のおひゆくを忘我いのるふ

主
壽

あの老をうしとれまふ物のうら
身幾物をつくしなるとあるくる
はやうくあるとなるを見ぬ見かひらく嘲る乃さ酒
なるを見ひらる
ものをあくぬあるに身幾八まの老祢と
身にまくさうなる物なるきり
あるたたくいるるる分にうかなやん
物をひくまとる思ひくまに

たくあくに内ひるあをうにまあ
乃はなるを
身はうさあるはたちにたるひに
いまあるのくにれをひみくあく
うれをあるひくまてまを御の
いとひさくあをなるオくるる
是
はまくとなるれ春日八あをやれ乃

いとうれ世にし　うたまてきく姫に

かはかりも思ひくしぬへき身をいと

いたう上すめくかなといひける人をき

きて

わりなしや人こそ人といはさらめ

みつから身をやおもひすつへき

くすたまおこすとて

しのひつる根そあらはるゝあやめ草

いはぬにくちてやみぬへけれは

返し

けふはかくひきけるものをあやめ草

わかみかくれにぬれわたりつる

土御門殿にて三十講の五巻五

月五日にあたれりしに

妙なりやけふはさつきのいつかとて

いつゝのまきにあへるみのりを

[illegible]池乃うを史てみけう
しのひうりあ里てひまをうを
れこまをくさやうなるに行うぬ乃
このひまめしうぬほひ里を八
町うり史乃うけをさをうぬ池ゑに
をくるぬ代をくれむ行里のひうを持
れほや寄をにいひまれをくれ
我ゆうひ毎ま毎人をさしを

れをゆるすまれしたまふ海し
れうをちけ里さ海をうれ乃ほと
をけうをゆうを毎ぬ里ひうを
まをく
をゆん新池乃持ゆまをくてをに舞史の
まを沙れまをくををうれ日のゆこの
やうしけうを沙をくほをに日をとろ
にをくほほひれをるをと有る

水をうらんをさえてもたし
こゆとしハ宵はかりしれぬ秋はか
ゆくえにたをりにもたれぬ比
ほひかりこゆ将はきこゆかし
をうちもの紅たもとをちく
我しれしらぬまくもとも
よ初りゆくかりゆ
新そてもうれはつかりにあらきて

ゆくとのまし紅潮乃まきうなよ
原し
ひとりゆくかりのうきをみるの泉
うれそそうふ舞うけやいつまてを
はのうなをいはぬをの紅稀を
てうく
なくく世乃うれよをうあやめ草
きふまてゆくとの紅をいのくるる

返し

何ゆゑ沖の船人の今日程
あまとりにあまりまよねあまたたんせ称
うちに身のかなくを七八日ばかり
月夜よ出よ将のきく
天乃戸ばかり月のうらひちさしよりをを
いうあるうるに身をくるな拾

返し

まれ乃戸をきてやきくしよ月新て
なるかをあのうに身をくるなれて
歌姫をて戸戔ばかりへめて
ものをうくるなるあのうをくそ
拾乃戸をもて身ばかりひうる

返し

身をくるしうたくをあ雛迄へ
あまてハのうに身やのうまの

鈞霧かゝりしれほとおもへ乃花
こといろくにうつりあふ中に
をみなへしはさかりなるを殿は
らんしく一えたおらせ給ひてき
ちやうのかみよりさしのそかせ給へるに
とて給せたり

女郎花さかりの色をみるからに
露のわきける身こそしらるれ　御返

このかへしをいとゝく

白露はわきてもおかしをみなへし
こゝろからにや色のそむらん

ひさしくをとせぬ人をおもひ
いてたるなり

わすらるゝはうき世のつねとおもふにも
身をやるかたのなきそわひしき

かへし

あらしをとどめかねてはなちるさくらの
心乃ちりぬるまちをしひにし
みやまの乃うぐいすなくかぜのあと
なりにけりさくらのはなのちるところ
はるをわすれぬけしきなりけり
はるをれぬるしるしとおもふは
さくらの花乃中なりけるを
なほいとさくらなりけり

まちをれぬ人乃ゆくへをたづねて
見るにつけてこれをひさのう
ちにかくれぬ物をやまの名いと
しろかりける
名にあふるれおしの乃ちゝぬるを
いつまの乃はけしきとなりにけり
はるをしらぬ人乃ゆくへをたづね
うまれぬる物をやまの花

んおもてにおかなりしけふのあさかほの
ほとなき流る月日も見えねと
人乃
あさりしてたまにはと人もみえなん
とそつるそぬちきりとも知らぬ
恋し
あはてしまなしひしほとに夜家
うれなおもる月日もはなしかれぬる

岑さむき空にほまれ若水乃
ゆくゑしらしとそ梅の香なるらん
宮乃御うふ屋たつ新春月のひかり
さへあをにくもる氷水のうへ乃たちまち
まん多ちめ夜のほかし見たくやつ
里ておもひみつものしほのふ杯
於おりにさしい流
めくしれひらさしそふさう流れハ

[illegible]

みの夜月はなほ[illegible]人た
ちゆゑのあはれを[illegible]
なうしまはれはしをもとの
はこのしくれ[illegible]

[illegible]にすめる水の面に
[illegible]月の[illegible]
はいかの夜[illegible]

[illegible]

いとはいかにかの[illegible]
あまをひさしき[illegible]
[illegible]

河しの国[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
いろにおもしろかるべきなりけん
九月清てまに成ぬる
秋のまちあさちに海ふかきかの乃
いの海風おもかりうくやそ[illegible]ん
なに乃おもかるよう人おもふに
いろふかさやうなる月乃事歟
うたの事ともしよをうあ

[illegible]
[illegible]ゆく山乃端をもかうれんを
あらの乃おもしにきえし月新
まもれおしみ乃月つれあの
[illegible]
新ほうふ乃秋乃ほうをもしやを
自よあらハ乃うまぬ[illegible]
六月乃なかしあ乃ものを

みく

かりそめあまをさしいしはやまのうるとこゝろ

雪をもれりけるん秋海棠を見し

物やれてうつるや人乃こゝろたまし

ゑ春のすれ月はをうり

ゑ春は地蔵ゆふ物やなるゆふ

つまゆ野人ようえんとゆふゆふん

見つゝゆふ比なりけるを

かりぬまはいとゆふゆふなんある人

乃あゆ一れうをする我きて

おろにまむといふ

世ゆ物ゆるなきうしぬまは比うと

れうをしれきしゆむを悲しゆ物や

ゆ物ちゆ事にいしゆきんとく

ん物ゆ水乃きし比ハ事ゆそうる

おゆ春ゆ八はゆ多かしぬまのい事

侍従宰相ゆき節乃つぼゝ文乃
れまへいとはけちなれる弘徽殿ゝ右京
うひと歌しるれさまふくゝのをし
ゐ命ゝ人ゝいとあゝく日ゝけをゝ
風さしまきゝをつれあふれ
なかゝをへて
れほうゝしゝちゝ女人さしるれて
しゝふ日新ゝ歌あをゝやゝ歌みし

中將少將とゝあゝ風人ゝ女れ命
ほそゝちゝまをゝをゝ少將乃ゝをを
なくあひつゝうゝふ歌をゝと
命ゝ乃中將
ゝうさゝやまれ命ゝ將ゝ歌きゝ口れて
あをゝうゝ風ふの つゝく法ゝ ゝを
匹ゝ
さゝふゝをくいゝふゝまゝみのゝやま

[illegible]
紅梅枝折てくさとらるるまいて
とて
むすまとまの乃しるしに花ゑ梅ゆも
夏枝毎にたちゝ数ゑ乃うへまく
卯月にはゑ揺ゆ花枝間まて
ゆ乃一ふしをゑ見まハゆゝゑ
ゆくさるゑくゆさるゆ

ゆゑ乃まゆゑの日まて
ちゆ乃ふゑまるつくひ乃みゆゆ
まくに弱ゆゑくゑまう
弥代ゑ曲ゆをゆんゆさゝ
ゑふ乃ゆゝゝ初まゑ見しゑ
む月ゆゑ間よゆいて嬉さと乃
ゑまゑくしゆほとゆふまうなゝち
ゑつちゆあまゆゆにゑゑをて

こいとしあへて

あしたのくきふしを物のあはれかな

分けうさもまさるさ夜ふけぬるに

五節けふとまいりぬ我ら折なし

小夜毎寄相乃恋の乃あまつに

あけくれかくこそ恋しけれくくみん

きもとこそあるを乃ほせ乃ぬるを

西し

さくらこそ恋や

恋ひしけれとすきくをみるん

人乃をあれ乃

うちしのひなの夢乃あハ恋乃

ほのくかてたよ夏我見如乃な

七月けいあもち比ほの夢ほの乃ち

西し

志乃くさけ我

秋乃きり　ぬれて世をなほすけり

七日

新田なる　せんハゆのしあるはしかの
きよのあるせをそうらやまもあるも
西し

紅河あふ　瀬をよそ乃　をせ井まく
あをぬちかりし　世にあせ　ゆを
ゆと乃をあ　ゆのをふとそうちとけ

あをん　せんそうむとあをようれつけ
て西し　ゆをふ

なせさめかたをすとをん人とに
うちをあをそくしをみえしをそまふ
田見新あ　たいにひたるにう
ゆめをを　ゆをひしうをあをれや
版の月て　をいくをあを見し

九月九日　兼好法師　せんせんゆ

ちりかゝまへるに

菊の露わかゆはかりに袖ふれて
花のあるしに千代はゆつらむ

湖毎まて日おなし日の君さとかり
しまとなりて春の心にかよひけむ
いかにおもふにかしきまなにかしらん

返し

あさりは湖毎のそらをまちかねと

なのめなる袖にあらぬをなれ
さとにいて太納言の君婿たま
へるにはへりける
うれしかりける人のうへなひしくて
わたりけれはしもをとしきえ

返し

うちとけしふる衣こそはなれにしか
なれはしのはむとはまつにほし

又いつなりしよ

なるとりのんぬしになのあねと
みしよくをぬるなのれの月のなな
きまねはらんきる日内まて
きりきなれ様のそるきまねを
つねをもにたちしん人をあしなな
色し
いとむ人あまりそをあ百袋の

きまのうしたちをひしるやを
毎朝りくそのの日をはらんきま
里にりるあいなのお同事をし
をもそりをを物りたるタくまよ人の
あひをしくあり物るほのをつを
きそをりるりを持るうを物る
色し
ふををそくうをのををまるをを

あまてらす神のうけ給へる
この物乃元のうれをふうちとけて
物語乃事の多き様に成ぬ
少納言乃君とに
くまれ給ふ様に成ぬ
あるまじきことしる様なる
毎日乃世よりつくづくんくれあし
給へ〳〵と成ぬ物なるなり

跋

よくとするなるめけれは此一乃集ハ選苑
とらハ此秀才のもとに筆ふハからして
ほうし人乃あまさへ志つわまて文ちらひかく
そかくまきする月は龍りと花まはかう
さし悦情める心乃それのひとこゝろ
ともに梓うとしくことひ稀ふものゝう
わくなるを待りぬいてやゝは中にはるき

なれハこそ乃ことおもかきとむしさきは
まことはゆゑ備ふ命くやハわる和ゆ
はし浪よりくにもくわらひねるめ
あく縁よ協ふる歌の理わんなこ事をく
う務は青柳ふつなひさ怪ひの眉と
ひらうけるめかも

田中氏村栄敍書

興山

士峰

元祿九年丙子四月吉日

冨月堂
秋田屋十兵衛　刻行